

宇美町子育て支援センター「ゆうゆう」の実践報告 から：地域の子育てコミュニティ施設として

川上, 利香
宇美町子育て支援センター「ゆうゆう」

<https://doi.org/10.15017/9085>

出版情報：生活体験学習研究. 7, pp.51-57, 2007-03-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

宇美町子育て支援センター「ゆうゆう」の実践報告から

～地域の子育てコミュニティー施設として～

川上 利香

A Report on Supporting Activity of Child-Rearing Yuyu, the Child Rearing Center in Umi Town

Kawakami Rika

要旨 宇美町子育て支援センター・ゆうゆうは、住民の要望がきっかけとなり生まれ、行政と住民が協働で運営にも関わっている子育て支援センターである。各地の子育て支援の取り組みを参考に、多くの方にご協力頂きながら「地域の子育てコミュニティー施設」として、親子が主体的に過ごすことができ、「見よう見まねで子育てができる」場所を目指して、平成15年4月に開館後、3年9ヶ月が経過し、本稿はその実践活動をまとめたものである。

キーワード 出会い、交流、安心、共感、子育ての学習、子育ての循環

1. 宇美町について

福岡県糟屋郡宇美町は、福岡市の南東に位置し、太宰府市や志免町に隣接する。町土のおよそ6割が森林という自然豊かな町である。宇美町の歴史は古く、3世紀中頃の中国の史書「魏志倭人伝」に「ふみこく」という地名で紹介され、神功皇后が応神天皇を出産された地として知られる。町の中央には、宇美八幡宮が鎮座する。戦後しばらく炭鉱の町として栄えたが、昭和38年に閉山になり人口も2万人ほどに減少した。その後は、道路網が整備され福岡市の近郊ということもあり、ベッドタウンとして人口が増加し、現在の人口は、約38,000人となっている。

現在、宇美町では、「まちづくりはひとづくり」を基本理念として、「いきいきのびのび誇れる町づくり」を達成するため、自然と歴史を守り、みんなが安心して暮らせるまちを目指して生涯学習の推進、子育て支援の推進に力を入れている。

2. 宇美町の出生数について

出生数は、近年毎年300人を少し越える人数であったが15年度以降、出生数は、少しずつ増加している。

3. 宇美町子育て支援センター発足の経緯

町施設と財団法人・女性労働協会の共催にて、平成6年、9年、12年と過去3回「保育サービス講習」（全10回講座）が開催された。その講習終了後に発足した子育て支援団体3グループが中心となり、町内で活動する他の子育て団体に「町の子育て環境の向上」を目的として呼びかけをし、平成14年4月に「宇美町子育てネットワーク・う～みん」（9団体及び数名の個人会員による会員、約100名所属）が誕生。その宇美町子育てネットワーク・う～みんより、親子の交流ができるスペース設置ほかの要望書を提出した。同年、町議会にて子育て支援センター事業が予算化され、築21年の民家の改築が決定した。設計段階より、行政と住民の協働が始まった。利用者の立場に立った施設づくり

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

宇美町子育て支援センター「ゆうゆう」(〒811-2101 福岡県糟屋郡宇美町大字宇美3694-2)

Tel : 092-957-6450 Fax : 092-957-6430

を目指して、コンセプトから行政職員とじっくりと話し合いを行った。同年12月より着工し、子育て支援センターは、翌平成15年4月の開館に向けて準備を進めていった。設計と同時進行で、運営についての協議も行政職員とネットワークの代表者が重ねて行い、協働による運営に結びついた。当時、先駆的に福岡市城南区の幼稚園の空き教室で運営されていた、子育てサロン“ひだまりサロン”(ひだまりの会運営)の見学やひだまりの会代表であった高山静子氏による勉強会などを開き、さまざまな視点から親子の居場所となる施設の検討を重ねた。開館に向けての、備品の購入、おもちゃの選定など時間をかけて検討し、開館となった。



写真1 子育て支援センター・ゆうゆうの内部の様子

4. 宇美町子育て支援センター・ゆうゆうの概要

1) 事業目的

地域の子育てコミュニティ・スペースとして、乳幼児とその保護者および妊婦が、いつでも気軽に来館し自由に過ごすことが出来る施設として、また、同じように子育てをしている人たちと出会い、交流できる場を提供することにより、子育てに関する問題や悩みを軽減し「子育てが楽しく、喜びを持ってできる、そして自分も成長できる」親がそう思えるような育児支援を行うことを目的としている。

2) 施設の概要 (*昭和55年建築の民家を改築)

- ① 敷地面積 401m² (約121坪)
建物面積 143m² (約41坪)
間取り 4LDK (現在)
- ② 開館時間 10時から16時
- ③ 休館日 土日祭日 (第2日曜日を除く)、

第2水曜日

8月10日～18日、

12月25日～1月7日

- ④ 利用対象者 町内在住の未就学児とその保護者、妊婦
子育てサークルや子育て支援団体



写真2 子育て支援センター・ゆうゆうの外観

3) 運営について

施設管理……宇美町福祉課

施設の運営……宇美町子育てネットワークに一部委託

4) 運営費

子育て支援センターの運営費は、光熱費などを含めて年間約600万円。

そのうち、185万円が子育てネットワークへの運営委託費

5) 運営スタッフについて

保育士資格を有する町の非常勤職員が3名交代で1名常勤し、ほかに、育児サポーターが常時2名(子育てネットワークより推薦)の3名体制で、センターに常駐している。(育児サポーターは、30代～60代の15名が現在登録)

スタッフは、主役は親子と考え、保護者の立場にも立ち、親子を温かく見守りながら自然な形で接するように心がけている。また、こども達が遊びに集中できるような環境の整備(おもちゃ、絵本、備品のレイアウトなど)やさまざまな交流が促進できるような場作りを考え、子どもと親、親と親、親と地域の人をつな

ぐ架け橋のような役割を担っている。

6) 事業内容について

① 親子に子育ての場の提供

子どもと保護者がいつ来てもいつ帰ってもよく、親子が「ホッとできる居場所」(安心できる場)、親子が各自の責任で自由に過ごせる場所(主体的に過ごせる場)、見よう見まねで子育てができる(日常の子育て学習の場)、他の親子やスタッフと自然に過ごすことができる場所(交流の場)が提供できるようにスタッフは、検討、工夫を行っている。いつでも来館者の目線を大切にし、「ようこそ!」という気持ちで親子に接し、見守っている。

② 地域への子育て情報の発信

子育て支援センターの掲示板の活用。ホームページの作成。「子育てカレンダー」(子育てネットワークの母親が中心となり作成)の配布。スタッフが地域の子育て情報を積極的に収集し発信。

③ 電話及び面談による育児相談

一年間では、数件、育児相談などの問い合わせがある。その際には、なるべく支援センターに来館していただくことをすすめている。

④ 子育てサークルの育成・支援

子育て関係のサークルの運営会議やサークルの準備をするために活用する場所として、支援センターの和室の貸し出しを行っている。

また、サークルメンバーからの相談についても随時スタッフが応じている。

⑤ 子育てに関する施策の推進

町の子育て支援事業(子育てサポーター養成講座ほか)、様々な施策に支援センターとして参画をすすめている。

7) その他の事業として

① “うたの広場”と“お外で遊ぼう!”

ゆうゆうは、コミュニティスペースを目的とし、主体である利用者親子が、自由な雰囲気、精神的な敷居の高さを感じることがないように、特に催し等はなく、基本的にプログラムなしでスタート。しかし、

利用者より、「気軽にいいけれども、いつも同じ親子に出会うとは限らないので、友達ができにくいように思う」といった意見や「イベントなどで出会うきっかけが欲しい」といった声があり、スタッフで検討し、平成15年12月から、月に1回の『うたの広場』を開催することになった。和室を利用し、自由参加で約30分間、歌とスキンシップ遊び、手遊びなどを歌と手遊びが好きなお母さんが中心となり進行、毎回10組前後、多いときは20組以上の親子が参加。お母さんの歌声がひざや腕の中にいる子どもたちに響いたり、心が和むひと時になっており、毎回好評である。

『お外で遊ぼう!』は、月に1回、宇美八幡宮の遊具のある場所に、スタッフがビニールシートを敷き、朝10時から12時の時間帯に親子を迎える。

母親の「公園に行っても人がいなくて、すぐに帰ってきてしまう…」、「遊び相手がいなくて子どもが淋しそう」といった声もあり、交流の促進と、自然の中での遊びの良さを知ってもらい良い機会になればという主旨であった。スタッフは、ゆうゆうの中と同じような接し方をしている。宇美八幡宮には、はとや鯉もいるので、エサをやったり、ボールを持ってきたりとそれぞれの楽しみ方で過ごす。ゆうゆうからも外用のおもちゃを持参し、外遊びの充実を図ることがこれからの課題でもある。

② “お母さんのためのワンポイント子育て塾”の開催

平成15年度より、基本的な子育てについての学習の必要性を感じ、宗像市より桑野嘉津子氏を迎え『ワンポイント子育て塾』を託児つきで開催。

3回の連続講座を通じて、親子のより良い関係や食事や睡眠の大切さについてなどを、保護者が学習する。毎回10名前後の参加者からは、「身近な座談会のような雰囲気での講座は、安心感があり、質問も気軽にでき、子育てにとっても自信が持てた」と大好評の講座となっている。3回の講座を終えた後、修了証を手渡し、スタッフからの拍手の中、お母さんの素敵な笑顔が毎回見られ、このような講座をたくさんの方が受講できれば、安心感の中、子育てができるのではないかと思える。

5. 利用者について

1) 3年間(平成15年～平成17年)の利用者数について

(単位:人)

年 度	開館日数 (日)	新規登録		利 用 者			一日平均	
		個人	団体	大人	子ども	計	親子(組)	子ども
15年度	228	317	40	2,735	3,796	6,531	12.0	16.6
16年度	229	161	1	3,180	4,173	7,353	13.9	18.2
17年度	230	138	0	3,432	4,455	7,887	14.9	19.4
合 計	687	616	41	9,347	12,424	21,771	13.6	18.1

2) 利用者の声(利用者アンケート)より

(平成17年度利用者を実無作為に抽出し100名にアンケートを依頼)

① 支援センター・ゆうゆうを利用しているお母さんの年齢

年 齢	人数(人)
25歳以下	9
26～30歳	34
31～35歳	35
36～40歳	17
41～45歳	4
46歳以上	1

② 利用されている、お子さんの年齢

年 齢	人数(人)	年 齢	人数(人)
0ヶ月	1	1歳	33
2ヶ月	4	2歳	39
3ヶ月	1	3歳	20
4ヶ月	4	4歳	14
5ヶ月	1	5歳	3
6ヶ月	1	6歳	3
7ヶ月	1		
8ヶ月	1	8歳(兄弟児)	1
9ヶ月	2		
11ヶ月	2		

③ 支援センター・ゆうゆうを利用する頻度

頻 度	人数(人)	頻 度	人数(人)
月に 0～1回	2	月に18回	1
月に 1回	17	ときどき	2
月に 1～4回	8	2～3ヶ月に1回	2
月に 2～4回	27	年に1～3回	6
月に 4～8回	4	ごくたまに	4
月に 5～9回	11	初めて	6
月に 10回	4	2回目	2
月に 12回	1		
月に 15回	2	その他	1

④ 支援センター・ゆうゆうをまた利用したいですかという問いに対して

回 答	人数(人)
思う	99
思わない	0
どちらとも言えない (あまり利用したことがないので)	1

*利用したいと思う理由(上位回答)

- ・子どもが楽しんでいるから、楽しいところだから
- ・いろいろな子ども達と遊ばせられるから
(子ども同士の関わりを大切にしたい)
- ・寒い日、雨天時に助かるから
- ・アットホームで温かいので居心地がいいから
- ・友達を作ることができる(親も子も)
- ・親同士の交流、情報交換ができるから

⑤ 支援センターを利用する理由について（複数回答）

理由	人数(人)
①子どもの遊び相手がいるから	73
②大人の話し相手がいる	66
③いろいろな情報を知ることができるから	62
④おもちゃや本など魅力的な物品がある	55
⑤雨の日や寒い日の行き場として	69
⑥先輩お母さんがいる	42
⑦専門家がいって相談できる	36
⑧家で子どもとずっと過ごすより出かけた	65
⑨相談したいことがあるから	8
⑩子どもの友達をつくりたい	57
⑪親としての自分の友達をつくりたい	40
⑫近くに子どもや子育て中の人がない	16
⑬親がくつろぐ（息抜きをする）場として	45
⑭地域のことを知る場として	32
⑮しつけについて学ぶ場として	28
⑯他の人の子育てを知る場として	41
⑰行政の事業について知る場として	14
⑱様々な情報を知る場として	46
⑲その他 ・子どもが行きたがるから	1
・無記入	2

⑥ 支援センター・ゆうゆうを利用して、何か変化はありましたか？（複数回答）

回答	人数(人)
親に変化があった	35
子どもに変化があった	47
変化なし	20

- * 「親に変化があった」内容（上位回答）
 - ・ 友達、知り合いができた
 - ・ 子どもとの接し方、子育てに余裕ができた
 - ・ 気分転換になった
 - ・ ストレスを感じなくなった
- * 「子どもに変化があった」内容（上位回答）
 - ・ 友達ができた
 - ・ 他の子どもと遊べるようになった

- ・ また行きたいと言っていた、行くのを楽しみにしている
- ・ 人見知りしなくなった、家族以外の大人に少し慣れた
- ・ お友達との関わりを学んだ（人にしてはいけないこと、譲ることなど）

⑦ 支援センターのスタッフに何をしたいですか？（上位の回答）

<してほしいこと>	望む(人)
①子育てについてアドバイスをしてほしい	48
②情報を教えてほしい	54
③話を聞いてほしい	38
④全体を見守ってほしい	54
⑤自分の子育ての知恵を話してほしい	42
⑥利用者が知り合うようにサポートしてほしい	28
⑦トラブルがあった時に仲裁してほしい	28
⑧相談相手になってほしい	22
⑨その他 話をするだけで楽しいので話し相手になってほしい	1
全てかなっていません	1

⑧ ゆうゆうのスタッフとして関わってみたいですかという問いに対して

回答	人数(人)
関わってみたい	39
そうは思わない	8
わからない	35
無回答	18

6. 子育て支援センターの実践から見えてくるもの

筆者自身も3人の子育てを経験中であるが、10年ほど前、一番最初の子どもが乳幼児の頃、乳幼児と接する体験不足を非常に感じ、子育てに対する不安も多かった。

そして、その頃に公園に出かけたが、他の親子となかなか出会うことができなかった。その後、育児サークルと出会い、子育て仲間ができ、先輩ママからのアドバイスなど、生の情報を得ることができ、子育ての

不安が徐々に柔らいでいった。その事と類似したケースが子育て支援センターの日常の中で、とても多く起こっていると感じる。親は、知り合い、友達ができることで、多くの不安が解消されているようである。

あるケースでは、育児ストレスを強く感じていると思われる母親が、子育て支援センターへ通って2～3ヶ月経った頃に、表情が明るくなり、考え方も前向きになったケースがあった。また、子どもが母親の不安からか、表情が無表情に近く、スタッフが心配していたケースがあったが、このケースに関しても、センターに通い、他の子と交流したり、スタッフが根気強く子どもに声かけを行ったりするうちに、子どもらしく、明るい表情に変化していった。日常の子育てに対して、継続して働きかけることができる事は、常設である子育て支援センターの意義のある点ではないだろうか。過去または、一部の地域では、親は出会いの場があり、多くの人の中で自然に子育ての学習ができてきたと思われる。しかし、現在の住環境や核家族の増加が進む社会の中で、親が出会い、子育て仲間や先輩ママを得ることは、難しくなっている。親が出会い、交流できるしくみ、きっかけづくりのための支援が必要である。そのためには、親に共感し、理解し、コーディネートする“人”が不可欠ではないかと日々の活動の中から感じられる。

7. 平成18年度の新規事業として

① 「ことりルーム」の開催

発達に不安のある子どもを持つ保護者より、「ゆうゆうに来たいけれど…他の方に迷惑をかけるのではないかと心配のため来ることができない」…という声が聞かれるようになり、ゆうゆうのスタッフ会議で検討し、発達に不安のある子どもを持つ人のための時間「ことりルーム」の開催が決定。月1回、10:00～13:00の3時間を専用の時間として設定することになり実施。平成18年11月より定期的実施。

② 中学校での子育てサロン

次世代を担う中学生に、乳幼児とふれあう体験を通して、さまざまなことを学習する機会を作っている中学校が宗像市にある…、という情報を得て、平成17年11月、宗像市の日の里中学校を行政の職員と一緒に視

察に出かける。すでに4年間、中学校での子育てサロンを続ける中で試行錯誤しながら、学校、地域、行政の協力のもと、中学生の心に栄養を与えられるような、子育てサロンが開かれていた。(現在、日の里中学校では、家庭科の授業として、子育てサロンが組み込まれている)

平成18年1月、日の里中学校・家庭科の村井弥生氏をゆうゆうへ迎え、中学校での子育てサロンの勉強会を開催。その後、これまでも職場体験や福祉体験を子育て支援センター・ゆうゆうで受け入れ、交流のある宇美東中学校に相談し、実現が可能であるか、行政の職員とも話し合いを重ねた。平成18年9月より、宇美東中学校の1室にて、子育てサロンの開催が可能となり、月に1回、中学校での子育てサロンを開いて4回を数える。毎回10:00～14:30、親子と中学生の交流が見られている。今後、どのように進めていくかが、これからの課題である。



写真3 宇美東中学校子育てサロンの昼休み



写真4 自然と笑顔になる中学生



写真5 「ちっちゃくてかわいいですね！」

8. 最後に

宇美町子育て支援センター・ゆうゆうでは、これからも保護者の置かれている環境に共感し、親も子もスタッフもそして、地域も共に育つという視点を持ち続け活動したい。子どもの健全な成長をまずは考え、乳幼児期の大切さを真摯に受け止め、啓発したい。子どもを通しての関係を築く支援をすすめていく事が、不登校やいじめなど社会的な子どもの問題の予防にもつながると考える。人から人への子育ての良い循環ができるようなしくみをつくり、子育てを通して人々が学習することで、より豊かな人生に思えるような、次世代育成につながるような支援を他の地域の方々と一緒に“希望”をもって試行錯誤で実践していければと思う。